

研修参加報告書

令和4年10月12日

会 派 名 江南藤クラブ
代 表 者 大藪 豊数

(参加者： 大藪 豊数)
研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年 月 日	令和4年10月3日(月)～10月4日(火)
研修時間	13:15～16:35 9:00～12:20
研修場所	全国市町村国際文化研修所
研修内容	令和4年度トップマネジメントセミナー ～災害や感染症などへの対応と 質の高い地域社会の構築に向けて～ ・大規模災害に備えて―想定外は起きる ・災害に強いまちづくり ・行政の危機管理～相次ぐ災難への対応と「ピンチをチャンス」 に変わるまちづくり～ ・ウェルビーイングな働き方と日本の未来

研修参加報告書

年月日	令和4年10月3日(月)～10月4日(火)
研修時間	13:15～16:35 9:00～12:20
研修場所	全国市町村国際文化研修所
研修内容	令和4年度トップマネジメントセミナー ～災害や感染症などへの対応と 質の高い地域社会の構築に向けて～ ・大規模災害に備えて～想定外は起きる ・災害に強いまちづくり ・行政の危機管理～相次ぐ災害への対応と「ピンチをチャンス」 に変わるまちづくり～ ・ウェルビーイングな働き方と日本の未来
■目的	<p>近年、新型コロナウイルスの感染拡大や全国各地で発生した様々な自然災害により、多くの人々がこれまでの日常生活を送ることができなくなるなど、数々の非常事態を経験してきた。今後、こうした非常事態の教訓を踏まえて、日本が新常識を取り入れた新しい社会に向かうために、行政は何をしなければならないのか。また、非常時、柔軟に対応できる組織であるためには何が必要なのか。自治体の積極的な取組が求められる。このセミナーで、様々な専門分野の先生から、非常事態にも負けない自治体を作るために大切なことは何かを学ぶ。</p>
■内容	<p>令和4年10月3日(月) 13時15分～</p> <p>元復興庁事務次官・市町村職員中央研修所 学長 岡本 全勝 氏</p> <p>講師紹介</p> <p>1955年奈良県明日香村生まれ、東京大学法学部卒、旧自治省に入省。鹿児島県財政課長、富山県総務部長、総務省交付税課長、内閣総理大臣秘書官、自治大学校長を務め、2011年に東日本大震災被災者生活支援本部事務局次長、以後、復興庁統括官、復興庁事務次官、内閣官房参与、福島復興再生総局事務局長と10年近く復興に従事。2021年より、現職。</p> <p>著書に、『東日本大震災 復興が日本を変える～行政・企業・NPOの未来のかたち～』（ぎょうせい）、『明るい公務員講座』（時事通信社）等がある。専門誌『地方行政』（時事通信社）に『公共を創る 新たな行政の役割』を連載中。</p>

講義内容 『大規模災害に備えて － 想定外は起きる 』

I. 想定外が起きた＝東日本大震災

1. 2つの大災害。天災と事故

(1) 千年に一度の大津波

- ・町が流された＝暮らしが成り立たない
- ・役場が流された＝住民支援の機能喪失

(2) 初めて経験する原発過酷事故

- ・わからない事故の状況、わからない国民への危険
- ・全住民避難の町村。遠く全国へ避難

2. 私の経験＝前例がないことをする

「現場がどうなっているか」がわからない

「何をしなければならないか」がわからない

(1) 組織の立ち上げ＝被災者生活支援チーム（緊急災害対策本部）

何からするか。何ができるか。誰を動かすか。

① 一人ではできない

- ・「助さん、格さん」を呼ぶ

② 組織を動くようにする

- ・目標の明示と部下への割り付け
- ・変化する事態に合わせ、それを先取りして変更する
- ・「社風」をつくる

(2) 何をするか＝前例はない

① これまでにない施策

「前例がない」「法令に書いていません」「予算がありません」は矛盾

② 官僚批判に答える

「前例通り」「できません」「検討します」「縦割り」を打破

3. 政策拡大と哲学変更＝「国土の復旧」から「生活の再建」へ

(1) インフラ復旧だけでは戻らない、にぎわいと暮らし

① モノ＝インフラと住宅

② 機能＝各種サービス、産業

③ つながり＝コミュニティ、つきあい

(2) 3つの分野、3つの主体、違う手法

II. 想定外は起きる

1. 重大危機に学んだ30年

安全だった戦後半世紀。「日本人は水と安全はただと思っている」

それを打ち崩した1990年代からの変化

1991年 湾岸戦争

雲仙普賢岳大規模火砕流

- 1993年 北朝鮮ミサイル発射実験
- 1995年 阪神・淡路大震災
地下鉄サリン事件
- 2001年 九州南西海域で北朝鮮工作船と海上保安庁巡視船の銃撃戦
- 2006年 北朝鮮地下核実験
- 2011年 東日本大震災
- 2020年 新型コロナウイルス感染症
- 2022年 ロシアによるウクライナ侵攻

・・・この間・・・

- ・豪雨災害の頻発
- ・中国軍の増強と日本領海侵入の常態化
- ・サイバー攻撃の激化

2. さまざまな危機

- (1) 想定される重大危機
大規模自然災害、武力攻撃、感染症など
- (2) 内なる危険
国民と職員の意識のゆるみ
- (3) 緩慢な危機
少子化、経済衰退、地域の衰退

3. 危機に備える

- (1) 事前と事後
 - ① 危機の事前準備
 - ② 危機事態対処
- (2) 経験と未経験
 - ① 一度経験したこと。応用
 - ② 未経験だけど想定できること。先例の勉強と訓練
 - ③ 想定外。想像力

4. 想定外に備える

- (1) 30年間でわかったこと
確実に言えることは「確実なことはない」
- (2) 思い込みの危険
「我が町は大きな災害が起きたことがない」
「原発は安全だ」

令和4年10月3日(月) 15時05分～16時35分

関西大学社会安全学部

特別任命教授 河田 恵昭 氏

講師紹介

社会安全研究センター長、工学博士。専門は防災・減災・縮災。現在、阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長（兼務）のほか、京大防災研究所長を歴任。京都大学名誉教授。

2007年 国連SASAKAWA防災賞、2009年防災功労者内閣総理大臣表彰、2010年兵庫県社会賞、2014年兵庫県功労者表彰、2016年土木学会功績賞、2017年アカデミア賞、2018年神戸新聞平和賞、2022年河川功労者表彰。日本自然災害学会および日本災害情報学会会長を歴任。

著書『これからの防災・減災がわかる本』（岩波ジュニア新書）、『スーパー都市災害から生き残る』（新潮社）、『12歳からの被災者学～阪神・淡路大震災に学ぶ78の知恵』（共著）（NHK出版）、『津波災害』（岩波新書）、『にげましよう』（共同通信社）、『津波災害（増補版）』（岩波新書）、『災害文化を育てよ、そして大災害に打ち克て 河田恵昭自叙伝』（ミネルヴァ書房）など。

講義内容 『災害に強いまちづくり』

1. 知っていますか？ 歴史が教える国連のSDGs（持続可能な発展目標）のねらい ※発展途上国は「開発目標」、先進国は『発展目標』
2. コロナ・パンデミックが教えてくれた災害文化の大切さ
3. なぜ大災害に備えることが豊かな社会づくりにつながるのか
4. “いのち輝く、こころ豊かな未来社会” を実現する

- ・悪いことは来ない事にするのが日本の得意技である。
- ・自然災害のスケールが全く違うことに気づいていない。
- ・2024年、大阪で万博で『いのち輝く・・・』と言っているが何も変わらない。それどころか、開催地は疲弊する。1970年もそうであった。

講演者の背景

1. 地元、大阪府守口市（人口14万3千人）の「第6次守口市基本計画策定（令和3年度から令和12年度の10年間）審議会」会長に就任
2. 委員は、まちづくり専門家、公募した市民、市議会各政党の議員代表（6人）など20人で構成
3. 令和2年度に5回の審議会を開催し、計画案はパブリックコメント後、市議会で承認

守口市の略史

1. 三洋電機、パナソニックの企業城下町として発展
2. 三洋電機の倒産、パナソニックの施設多極化、関連企業の分散で、企業市民税が14分の1に減少
3. 中心市街地が存在で、貧弱な道路網などの旧市街地がパッチ状に存在
4. 交通至便（私鉄と地下鉄、モノレール駅、国道1号線、中央環状線、阪神高速道路、阪和自動車道）

復興まちづくり先行事例を参照

1. 阪神・淡路大震災後にできたHAT神戸は復興まちづくりの成功事例。地域コミュニケーションの活性化、「防災国体2022」が10月22、23日に開催。神戸の復興を全国に見て頂こうと考えている。
働く機会を多くして、市民の収入を増やすことが一番、まちを運営する感覚が必要。
2. 東日本大震災で成功した岩沼市、東松島市などの新しいまちづくり（日常生活で車不要、中心市街地形成、人口増加）参照
3. まちづくりのポイントは、働く機会を確保して収入が期待できること。仕事があることが基本となる。

“まちを運営する”という考え方が必要

1. 時間スケールを考慮して、実現可能な目標を作る。また、既存のまちの変革には限界がある。
2. 人口減を緩和するには、新しい仕事を作る必要がある。
3. まちの魅力や特徴を再考する（例：観光は、美しい景観や文化・歴史遺産を見るから、参加型、体験型に移行しつつあり、わがまちにも潜在観光資源はある。京都・奈良・大阪から和歌山・兵庫へ）
4. 市民・町民の協力体制はできるのか？

コロナ禍が契機

観光から体験力点

コロナ禍で修学旅行先が一変した。

- ・2019年度から2020年度で京都府が16.8%から5.4%になった。
- ・中学生や高校生に歴史の遺産を見てもらうより何かを体験した方が楽しむ。

『体験』重視の傾向が強まっている。

将来都市像とまちづくりの目標

いつまでも住み続けたいまち、守口

～暮らしやすさが、ちょうどええ～

- (1) 子どもや若い世代が夢を育めるまち
- (2) 一人ひとりが自分らしく活躍できるまち
- (3) 安全に安心して暮らせるまち

(4) 市民が誇れる魅力あるまち

(5) 持続可能な都市づくりを進めるまち (SDGs)

1. 知っていますか？ 歴史が教える国連のSDGs (持続可能な発展目標) のねらい ※発展途上国は「開発目標」、先進国は『発展目標』

・ 発展目標の先進国がお金を出してくれないと、途上国の開発目標はできない。

わが国は災害問題で国際社会をリード

- ・ 1990年を初年度とする国連の「国際防災の10年、IDNDR」を提唱し、全会一致で採択された。
- ・ ところが皮肉なことに、この10年は大災害が世界中で発生した。1991年バングラデシュ・高潮。フィリピン・ピナツボ噴火・・・
- ・ 途上国で大災害が起こると、それまでの経済開発努力が無に帰すことが分かった (貧乏になる)。
- ・ したがって、経済開発するにはまず、防災対策を先行しなければならない (防災の主流化)。
- ・ その成果が、2001年ミレニアム開発目標、2005年兵庫行動枠組、2015年仙台防災枠組、同SDGsに反映された。

持続可能な開発のための2030アジェンダ

MDGsとSDGsの比較

途上国の人口増、貧困、災害の悪循環・・・これは東京一極集中の日本でも起きている。

第2回国連防災世界会議 (2005年：神戸) では、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター長として、兵庫行動枠組の提案・採択を支援

第3回国連防災世界会議 (2015年：仙台) では、講師河田氏は5つの全体会議、ワークショップで発表・討議し、日本政府と協力して、兵庫行動枠組の「Build Back Better」を残し、SDRを共同提案・採択

2. コロナ・パンデミックが教えてくれた災害文化の大切さ

- ・ 自然災害だけではない、感染症、テロ事件なども担当
- ・ 安倍元首相の撃たれた現場から病院まで20kmほどしかないのに、50分かかった。
- ・ これからの国家的イベントには救急医療を備えるのも大切。

- ・都市型災害から都市災害に変わるのは『相転移』が発生。
- ・耐震化率は今90%を超えているが、それは高齢者が亡くなって、家が建て替わっているからである。」
- ・熊本では最初の地震で高齢者が避難しなかったため、翌朝の強い地震で避難しなかった高齢者が亡くなった。
- ・東日本大震災の津波で逃げなかった人たちの理由は？
 - 1位 仕事がある。
 - 2位 防潮堤がある。
 - 3位 気象庁の津波警報は信用できない。
- ・人間は起きてほしくないことは起きないこととしてしまう性格がある。
- ・戦争は基本的に世界では宗教戦争である。したがって、負けた国の国民は皆殺しが常識であった。
- ・世界中でコロナの死亡率が少ないのは日本だが、それは移民が少ないこと、清潔文化が浸透していること、水道水が飲める12の国の一つであることなどが理由である。

- ・災害対策、自助・共助はお金が掛からない。
- ・文化と文明の両者重視の価値観の醸成。
- ・新興住宅では消防団も水防団も町内会も無いため、災害時に災害対策が機能しない。災害文化は低下の一途である。
- ・災害の文明は開発で良いが、文化を発展させなければならない。
- ・まちのひとが仲良く生活することが今後は大切。

3. なぜ大災害に備えることが豊かな社会づくりにつながるのか

- ・縮災（Disaster Resilience）の向上
 予防力の強化
 1. 致命的な被害にならない事前対策
 2. 減災のための充実した緊急連携対応

回復力の強化

1. すみやかな復旧・復興そして被災者の生活再建
2. さらに豊かな社会に向かう「創造的復興」

災害文化は人間の本能を抑え防災意識を育てる！

- ・自分の先入観に支配されない。・・・前も何も起こらなかったから、今回も大丈夫だ！
 プロスペクト理論というバイアスに負けない。
- ・危険の存在を認める。・・・目の前の危険を認めようとせず、私は大丈夫だ、何の心配もしなくてよい！
 正常化の偏見というバイアスに負けない。

4. “いのち輝く、こころ豊かな地域社会”を実現する

- ・防災は『こうだ!』と決まってない。正解はない!
- ・センターでは毎年防災絵本を作っていく。これが100年後のアンデルセン童話・グリム童話となるはずである。

令和4年10月4日(火) 9時00分～10時30分

福島県福島市長 木幡 浩 氏

講師紹介

1960年福島県生まれ、1984年東京大学経済学部卒業、同年自治省入省。国、地方自治体で、地方行財政や地域振興、健康福祉、危機管理等を幅広く担当。岡山県副知事、消防大学校長、復興庁福島復興局長を経て、2017年12月より現職(二期目)。東日本大震災からの復興創生はもとより、相次ぐ災難(コロナ、台風、地震、農作物被害など)や東京2020、朝ドラ「エール」などをバネとして、新機軸の施策を展開し、「世界にエールをおくるまち」を目指している。

講義内容 『行政の危機管理』

～ 相次ぐ災難への対応と「ピンチをチャンス」に変えるまちづくり ～

災害の傾向

気象変動の激化と社会環境の脆弱化

～都市化、高齢化、国際化、デジタル化・・・

災害の大規模化、激烈化、複合化、頻発化

- ・自然災害～巨大地震、巨大台風、ゲリラ豪雨、噴火・・・
- ・事故災害～原発災害、通信障害などによる機能マヒ
- ・コロナ禍

福島市だけで多くの種類の災害に見舞われている。

二次的災害⇒風評被害・市民間の分断・地域の衰退

風評被害で農作物が売れなくなった。

原発より約60kmも離れているのに宿泊施設のキャンセルが相次いだ

人口減少によって地域の存亡をかけるような問題となった。

東日本大震災（2022年3月1日現在の状況）

死者19,759人（福島市17人）

↓

原子力災害との闘い

避難者の状況

ピーク時

- ・市内への避難者 12,065人
- ・市外への避難者 7,437人

〈見えない放射線〉

初期の情報不足

不安・恐怖

全国的な風評被害・偏見差別⇒今も根強く残存

コロナ禍での差別偏見、誹謗中傷と共通

災害との共存 福島市の地域特性

市内に洪水災害・火山災害・土砂災害・活断層による震災と多くの災害が存在する。

令和元年 台風19号の概況

初めて福島市内に大雨特別警報を発令した。

避難情報を13件出した。避難指示6件・避難勧告5件など

福島県沖地震の概況

令和3年2月13日23時08分

最大震度6強

死者1人、負傷者15人

- ・市の公営住宅が全壊した。
- ・ブロック塀の倒壊が多かった。

令和3年3月16日23時36分

最大震度6強

負傷者17人

- ・インフラ上に被害、阿武隈川の橋に被害、鉄道駅などに被害。

水害対策パッケージ 令和2年2月 国土強靱化地方計画策定

阿武隈川上流域の流域治水

- ・遊水地計画・・・これは江南市にも応用できるかも。
- ・砂防ダム

流域治水 ～濁川の改修

- ・阿武隈川よりも堤防が低かったので、バックウォーター現象により氾濫した。
- ・堤防をかさ上げする。

流域治水 ～普通河川・準用河川の改修

- ・雨水貯留施設を作った。
- ・河川改修・樹木伐採・河道掘削⇒流下能力の強化

災害情報収集伝達体制の強化①

- ・災害対策オペレーションシステムの構築

災害情報収集伝達体制の強化②

- ・情報伝達の多重化
- ・実効ある情報伝達

質問 市内にあるCFM（FM-POCO）との災害協定内容は？

回答 大いに利用している。

市外協定は、総務省の災害臨時FM時代から結んでいる。

質問 災害放送に利用していないのか？

回答 災害用の防災ラジオは委託している。

年間、番組スポンサーやイベント委託などで4千万円ほど予算を組んでいる。

市役所に、市役所専用スタジオがあり、災害時にはそこから市長が市民に向けてメッセージを送っている。

防災体制の強化①

- ・災害対策本部室の見直し
- ・首長ほか市の主なセクションを一部屋に整理した。

防災体制の強化②

- ・避難等判断水位の新設・見直し
- ・水位の設定が間違っていたことが分かり、県に直してもらった。

防災体制の強化③

- ・防災訓練の実効性確保・・・台風シーズンではなく、GW明けに変更した。コロナ禍・夜間・真冬における訓練も実施した。

・事前の備えの強化

排水ポンプなどの稼働確認

応援職員などの事前登録（避難所要員など）

罹災証明発行のための家屋調査の改善

防災体制の強化④

- ・ 応援、受援に対する備え
給水車・災害ごみ処理受入・保健師派遣・家屋調査要員派遣
T e c - F o r c e ・水位シミュレーション・電源車（要請後不要に）
県内他市に給水車2台派遣・ペットボトル水提供・漏水修繕支援
可燃ごみ処理受入
- ・ プッシュ型被災者支援への転換
総合相談窓口のワンストップ化
浸水地区への相談窓口・手続受付の開設、災害ごみの巡回収集
浸水地域でのボランティアニーズの把握
浸水地域に、申請前の損壊状況調査

地域住民の防災力の向上①

- ・ ハザードマップの全戸配布

地域住民の防災力の向上②

- ・ 地区防災計画策定
- ・ 個別避難支援プラン
- ・ ぼうさい体験パッケージ
街なか避難所体験
運動会に防災メニュー
外国人との防災ワークショップ
女性目線の防災ワークショップ

新たな避難対策①

- ・ 避難所における感染防止対策
- ・ 分散避難への転換
安全な方は自宅避難
避難所の定員縮小と増設
市民参加の避難所運営
ペット同伴避難所開設
- ・ スーパー等駐車場の活用

新たな避難対策②

- ・ 障がい者通所施設を福祉避難所に
- ・ 旅館・ホテルでの妊産婦などの避難
- ・ 多様な施設の活用

新たな連携①

- ・ 県との相互協定
- ・ 情報通信に関する連携
- ・ 多様な事業者との連携

新たな連携②

- ・ 上流域との連携
- ・ 防災を教育や観光、まちづくりに

留意事項（特に首長として）①

- ・ 想定外を想定せよ
- ・ 災害対応の全体把握

留意事項（特に首長として）②

- ・ 避難情報の発出 ～予測を踏まえた決断

留意事項（特に首長として）③

- ・ 再生への強い意思とビジョンを示す
- ・ 再度災害への対応

留意事項（特に首長として）④

- ・ 安全安心な地域に向けて
- ・ 最後は自助 ～勇気をもって住民意識の向上を！

令和4年10月4日(火) 10時50分～12時20分

株式会社 Y e e Y 共同創業者／代表取締役
島田 由香 氏

講師紹介

慶應義塾大学卒業後、パソナを経て、コロンビア大学大学院にて組織心理学修士号取得。日本GEにて人事マネジャーを経験し、2008年ユニリーバ・ジャパン入社。2014年より取締役人事総務本部長に就任。人のモチベーションに着目し「WAA」など独自の人事施策を多数実行、同社はForbes WOMEN AWARDを3年連続受賞。2017年に株式会社Y e e Yを共同創業し代表取締役に就任。マーティン・セリグマン博士などウェルビーイング研究の世界的権威を招聘したカンファレンスを行うなど、日本企業や社会のウェルビーイングリテラシー向上に貢献。企業の経営支援や人事コンサルティングなどを通じて、日本企業のウェルビーイング経営実現に取り組んでいる。また、自身も1年の半分近くをワーケーション先で過ごすなど地域活性に情熱を

燃やし、地方自治体の組織コンサルティングやワーケーションなどのコンテンツ
開発支援、地域住民のウェルビーイングを高める仕組みづくりを行う。
内閣官房 行政改革推進会議 委員。「国際女性デー HAPPY WOMAN
AWARD 2019 for SDGs」受賞。

講義内容 『ウェルビーイングな働き方と日本の未来』

講師が今考えていることは・・・

議員や職員がウェルビーイングを考えてくれないと何も進まない。

日本の未来に希望しか持っていない。

その大きな切り口が市議会や市職員だと考えている。

強みを生かす・・・

議員も事業主の一人だと考えている。

Strengths Finderをやってみて！

- 働き方
- 地域活性
- 真の人材育成
- ウェルビーイング

より良い、より強い組織をつくるため・・・

民間企業では

- ・リーダーシップ
- ・チーム グループとチームは違う 目標を持っているのがチーム
- ・エンゲージメント 第三者に向かって前向きに関わろうとする意識
※モチベーションとは違います

エンゲージメントが高いか低いかでその内容が決まる！

エンゲージメントが低すぎる人は人の足を引く、最悪である。足を引っ張る！

ウェルビーイング 幸せ 継続的幸福

よい (Well) 状態 (Being)

心身ともに健康で社会的に良い状態

- ・心が豊かなこと
- ・心地よい

ウェルビーイング豊かな職場とは・・・

- ・アイデアと意見と笑顔が溢れる職場
- ・行き来と活躍する熱意溢れる職員
- ・未来を創造するエネルギー溢れる役場

自律人材 自ら考えて動ける人

幸せの3つのレバー：内発的動機のカギ

●成長 ●自律・自立 ●つながり

職員の皆さんに、これらを感じる機会を提供していますか？

自律型組織とは・・・

- ・メンバーの強みが最高に活かされる組織
- ・メンバーが主体的に考えて動く組織
- ・その時最高で最善の事をする組織
- ・その動きを妨げることなく迅速に動く組織

※参考著書 奇跡の経営 ティール組織

『やりがい・働きがい』の構造

強み・・・好きな事&得意な事

フロー・・・集中／没入／パフォーマンス⇒結果が良くなるので自信が持てる

難易度やスキルレベルで入りやすくなれる

結果・・・成長／進化／効果

意味や意義を感じることになる。

『スキトク』

好きな事・得意な事をする

●成長・・・多くの管理職は褒めない。

褒めているか？

●自律・自立・・・多くの管理職はまかせない。

自立は自ら立つ 自律は自分の音色旋律を出すこと
いちいちチェックせずに相手を信じてあげてほしい
任せてあげることが大切

●つながり・・・多くの管理職はかかわらない。

積極的に関わっていきこう！

自立から自律に向かって行くには・・・

自信をもつことから始まる！

↑

そのためには自発が必要！ 自分から意思を発する。

↑

自覚 本人が自分の事を知ること・好きな事・好きなモノから始まる

今日伝えたい事・・・

ウェルビーイングな働き方

- ・ワーケーション 自分もやる 市区町村に誘致
- ・副業
- ・複業
- ・福行

※本業と副業に分けることもナンセンスで、すべて本業。

真の人材育成

- ・意志あるローテーション 目立つ人間を左遷＝最低の処遇
- ・人材交流

働き方のこれから・・・をこれからも！

働く場所と時間をフレキシブルに

地域でWAA＝ワーケーション×地域創生

副業で豊かなキャリアを（副業を複業へ）

地域でWAAの可能性

- ・ワーク（仕事）×バケーション（休暇）＝ワーケーション

生産性

↑

営業成績

↑

創造性

人口／関係人口

↑

移住

↑

観光／産業

ワーケーション

ワークは働く。これが先。

バケーション・・・ベイクイト・・・空にするという意味がある。

真の人材教育

リーダーシップ研修

海士町（あまちょう）

高浜町（原発のある町）・・・体をつかう研修

地域活性

つながり

これは防災・災害対策にとっても役に立つ

仕事における幸せの効果

変化への適応度が45%高くなる。

イノベーションは3倍！

営業成績37%高い！

生産性が21%あがる。

欠勤が41%少ない。

ハッピー＝感情・ポジティブ感情のひとつ

ウェルビーイング＝状態・心身ともに健康で社会的によい状態

生産性は上げるものではなくて、上がっていくものと考えべきである。

ウェルビーイング意識の高い人は・・・

健康

長寿

素晴らしい人間関係

仕事のパフォーマンスと創造性向上

社会への参加・社会性のある行動

レジリエンスの向上

ウェルビーイング意識の低い人

人と比較したがる⇒比較は人とではなく昨日の自分と比較する！

●ポジティブな感情

●主体的に関われる

●よい人間関係

●意義・意味

●達成・熟練

ポジティブな感情が新しい考え・行動・関係を生む。

質問 ブルーカラーにワーケーションはできるのか？

回答 ワケーションをあきらめた。

公平や平等か？

ニーズを生かすことを考えた。カレンダー通りに休みが欲しいなどの要望を満たすこと。オペレーターからもっと休みが欲しいと言う希望が出た。

年間労働時間を移動させて休日を増やした。

■所感

2日間にわたる研修であったが最後の「ウェルビーイングな働き方と日本の未来」の研修が最も大切だと感じた。全ての危機管理も危機意識も、そして災害対応も関わる皆さんの意識が高くないと机上論におわってしまう。

江南市は市民の多くが関わる災害訓練の内容が薄く、参加者も少ない。参加意識が薄いからである。この参加意識を高めないといくら市職員や議員が学んでもそれは役に立たないことになる。

市民の参加意識を高める施策を考えるべきだと感じた。